

カード交換

誕生日やクリスマスなどにカード交換を行う習慣は何時頃から始まったかは、はっきりとしませんが 19 世紀中頃のイギリスで郵便制度の発足とともに始まったものが次第に諸外国にも浸透していったというのが有力な説となっています。

日本では既に奈良時代の頃から年始回りという習慣があつて、平安時代には直接伺うことができない遠方の人に年始の手紙を書いていて、これが年賀状になったとも言われています。

1873 年(明治五年)に郵便はがきが発行されると安価であつたということから急速に年始の挨拶として普及しました。その後、年賀状の特別扱いや年賀切手の発行なども行われましたが、アメリカとの戦争が勃発した 1941 年の暮れに廃止されました。戦後の 1948 年に年賀切手が復活すると 1949 年にはお年玉付き年賀状が発行されて現在に至っています。

「はがき」ですが「葉書」とも書くように木の葉に書いていたからこの名前となったという説がありますが、実際は「端書」から「はがき」となったのが本当のところです。

しかしタラヨウなどの葉に釘などで傷をつけると黒くなります。また英語でも「リーフレット」という言葉があるように木の葉を通信媒体として使っていたのは確かな事実です。

通信媒体としては他に陶板、木の板、羊の皮、象牙なども使われていましたが、やはり主流は紙でした。

セルロイドがカードとして使われるようになったのは何時ごろからなのかも、はっきりとしませんが 1878 年以後であるのは確実です。というのはこの年にハイアットがセルロイドをシート状にするという技術の特許を取得しています。(アメリカ特許 199,908 号)その後、1882 年にセルロイドに印刷を行うという技術が開発されるとセルロイドカードが一般化することとなります。但しはじめのうちは企業の宣伝用のカードで個人から個人へとなったのは 1890 年代になってからです。

セルロイドに印刷する方法は金型につけたインクを熱と圧力によって内部に固定してしまうというもので、これですと半永久的に色あせしません。最初は単色刷りであつたのが多色刷りとなって人気を博しました。また印刷した上に薄くて透明なセルロイドシートを被せて熱圧着させるという方法も取られました。これですとさらに永久的なものとなります。

このようにして生まれましたセルロイドカードは 1900～1940 年ころまで用いられましたが、壊れやすいということと戦争の激化で原料の硝化綿が軍用に使われたということなどから次第に姿を消していき戦後のものはほとんど見られません。